

講演師



神田香織 公演会

チエルノブイリの祈り

未来の物語

一九八六年四月二十六日に起きた
「チエルノブイリ原発事故」
消防士とその妻を通して、事故の悲惨と
人間の幸福と愛とを問いかける力作

2017年10月28日(土)
草加市中央公民館ホール
■開場12時30分・開演13時

- チケット 大人1,500円(当日2,000円) 高校生以下・障がい者(介護者1名)500円
- チケット取り扱い 草加文化会館 ☎ 048-931-9325
- 問合せ・連絡先 今村 090-2637-7507 小見山 090-8053-2206 村木 080-5689-7788

主催 「キビタキとわらしの会」 =子供たちに原発のない社会を=
協賛 「医療生協さいたま草加支部・八潮支部」、「癒し」としての自己表現展 in 草加」、「草加市平和委員会」
新日本婦人の会(草加支部)、カフェ&ギャラリー「のんの」、山猫くらぶ、「ユミ・ダンススタジオ」

あれから「6年」 福島を忘れない

神田香織 プロフィール

福島県いわき市生まれ。

福島県立磐木女子高卒業後、東京演劇アンサンブル、渡辺プロダクションドラマ部を経て昭和55年神田山陽門下生となる。二ツ目以降、ジャズ講談や一人芝居の要素を取り入れた神田香織独自の講談を次々発表、講談の新境地を切り開いている。

昭和55年 神田山陽門下生となる

昭和59年 二ツ目昇進

昭和61年 国立演芸場にて「はだしのゲン」発表

平成 元年 真打昇進

平成14年「チェルノブイリの祈り」発表



※主な著作

2005年「花も嵐も、講釈師が語ります」七つ森書館

2010年 新作講談の創り方語り方「乱世を生き抜く語り口を持って」インパクト出版会

2014年 「3.11後を生き抜く力声を持って」インパクト出版会

講談「チェルノブイリの祈り」～未来の物語～

この物語は、スベトラーナ・アレクシェビッチ著『チェルノブイリの祈り』のなかの、消防士とその妻の哀しい物語を、自身が2年がかりで翻案したもので、「純愛物語」です。

ささやかな幸福を満喫していた「原発推進派」のエリート消防士夫婦。

彼らがなぜ“一回きりの人生”を無残に破壊されなければならなかったのか？

1986年に起こった大惨事の中で、若い二人に降りかかった体験を語りながら、科学の発展は果たして人間を幸福にしているのか、科学の発展に人間はついていけるのかを問う作品です。

「なにをお話すればいいのかわかりません。死について、それとも愛について……。私達が経験した事や、死については、人々は耳を傾けるのを嫌がる。恐ろしい事については、

でも……。私があなたにお話ししたのは愛について。

私がどんなに愛していたか、お話ししたんです。」

「3、11後、上演にあたって」2012.10

講談師になりたての頃サイパンの戦跡を見たのがきっかけで、戦争にのめり込み、東電福島第一原発事故が起きる26年前から「はだしのゲン」を、そして9年前から「チェルノブイリの祈り」を語ってきました。ちょうど「はだしのゲン」の講談化に取りかかった年、1986年にチェルノブイリの原発事故が発生し「軍事利用」目的の原発も「平和利用」目的の原発も、ひとたび制御できなくなれば同じだと世界中が「核」の恐怖を再認識させられました。チェルノブイリと郷里福島が二重写しになり、胸がつまりそうになったことを今でも覚えています。

原発事故を防ぐにはチェルノブイリ事故から学ぶこと。我々のような目にあってほしくないというチェルノブイリの人々の祈りを、また、地震国日本で未然に事故を防ぎたいという私もふくめ大勢の人々の祈りを、私はこの作品を通じて懸命に訴えてきたつもりでした。

なのに古里がこのような無惨なことに…。いまだに悔しくてたまりません。

昨年事故後、自分の無力さに、一時はこの作品を封印しようと思いましたが。しかし上演を切望する声に背中を押され、チェルノブイリ事故からちょうど25年目の2011年4月26日、福島原発事故後はじめて再演。会場一杯のお客様はものすごい熱気で怒りと祈りを込めて語る私に熱い拍手を送ってくれた。このとき、落ち込んでいる場合ではない、2度目の事故を絶対起こさないためにも私にできることは語り続けることしかないという決意。一刻も早く福島県民が心身の安定を取り戻し、子どもたちが安全な自然の中で成長する事ができることを祈りつつ、福島に生まれ育ったのを運命ととらえ「チェルノブイリの祈り」を今後も語り続けます。チェルノブイリの祈りはフクシマの祈りでもあるのですから。

「講談」と「落語」はどう違うの？

「講談」「落語」はことあるごとに比較されています。

その違いは一体どこにあるのでしょうか。簡単に言ってしまうと、「落語」が会話によって成り立つ芸であるのに対し、「講談」は話を読む芸という言い方ができます。勿論、読むといっても単なる朗読とは違い独特のしゃべ調子と小道具の使い方によって展開される訳なのです。よく使われる小道具として有名なのが張り扇と釈台(机)です。

張り扇で釈台を叩きパンパンという音を響かせて調子良く語ります。この小道具を巧みに使った芸こそ「講談」ならではのものです。また、「講談」は「落語」と比較して歴史が古く、奈良、平安の頃にその原型が見られます。但し、一般に良く知られる「講談」の始まりは「太平記読み」とされています。食に困った浪人が老若男女を集めて「太平記」を面白おかしく読んで聞かせたというものです。これが「講談」のルーツです。